E 12　『家内心得草』と Mrs. Beeton's『Household Management』との比較研究

東京家政学院大家政　亀高京子　○犬尾智穂子

目的　明治初期刊行の翻訳家政書は、漸次その内容調査とそれらが我が国の家政教育・家政学におよぼした役わりが考察され、また原書名、原著者および訳者についても次第に明らかにされてきている。しかし比較的早い9年5月の出版になる穂積清軒訳『家内心得草』に関しては、これまでに若干の調査があるのみで、原書名、原著者はもとより訳者の経歴についても全く不明のまま今日に至っている。そこで本研究は、これらの点を明らかにし、ついで本書と原著書との比較検討をおこなうとともに内容を考察した。

方法　『家内心得草』は国立国会図書館所蔵本を用い、Mrs. Beeton's『Household Management』は発表者所蔵の改訂版を、また『女鑒必讀女訓』は東京家政学院大学図書館所蔵本を使用した。訳者の経歴については『大日本人名辞書』に依った。

結果　『家内心得草』の緒言には「此書ハアメリカノ婦人ビートン氏カ撰著セシ料理叢書中保家法ノ一篇ヲ撮譯セルモノナリ」とあるが、これまでの文献調査では探し得なかった。一方、明治7年刊の高田義甫述『女鑒必讀女訓』の頭書欄にイギリス国イサベラビートン著「ハウスホルトメヂージメント」の書名が紹介されている。このビートン夫人は英国の料理・家政の元祖と称されるところから、国籍は異なるが同一人物ではないかと調査した結果、1861年刊の Mrs. Beeton's『Household Management』が原著書であることが判明した。両書を比較検討した結果、原書の全篇より主婦を対象とした家政一般の心得を抄訳・意訳したものであり、家政・主婦の語彙、召使の使い方、家事の週間計画、日曜日を休日にすべきことなどの特色が考察された。